

EPS と SVT 心臓電気生理学的検査と上室頻拍

永嶋 孝一(著)

心臓血管研究所名誉所長

山下 武志

あれから 20 年、 成長の軌跡を込めた永嶋渾身の不整脈本

僕は、永嶋孝一先生が学生の時(永嶋君だ)から知っている。とある研究会が始まる前、彼は僕が執筆したテキストを片手にたたずんでいた。「この本で勉強しています。サインを頂けませんか」と自信なさそうに彼はつぶやいた。そばには彼の先輩の不整脈医がいて、「頑張り屋なんです。学生なのに不整脈に妙に興味があるようで」と彼を支えた。そして、約 20 年後、その彼は、今や不整脈分野で飛び羽ばたくスターだ。「自信なさそうに」はすっかり影をひそめ、この 20 年間の経験を背景にした自信に満ちあふれている。研究者であると同時に立派な教育者として成長したことにも驚く。

かつて臨床電気生理学的検査を学ぶためのテキストは、Josephson の『Clinical Cardiac Electrophysiology』という洋書と、早川弘一、比江嶋一昌の『臨床心臓電気生理学』という和書の 2 冊しかなかった。その後数々のテキストが出版されたが、臨床電気生理学の深化とともに、多くの専門家が執筆したものを編集するという形にならざるを得ず、ともすれば読者は置いてきぼりを食らった。本書は SVT に絞って、著者が一人で全てを執筆したという点で、読者にとって理解しやすくなるばかりでなく、著者の信念が伝わるという意味でもこれまでの類書と際立った違いを感じさせてくれる。

本書の第 1, 2 章は、SVT を学ぶ上での入り口だ。12 誘導心電図、臨床電気生理学的検査の基本(これらの多くは永嶋先生が医師になる前に確

立していた)を、うまくコンパクトにまとめている。そして、真髄は、これに続く第 3~5 章だ。成書とは異なり、「歴史」を軸に解説が進む。成熟したものを全て同時に見せられると、複雑すぎて理解できないことはよくある。それとは違って、著者がこの 20 年間学んできたものを、その時間軸にしたがって解説してくれるので、その理解に AH 時間の jump up のような飛躍を要しない。その歴史を途中まで追ってきた人にとっても、その後どのような進歩があったのか、手にとるようにわかる。「歴史」という視点を臨床電気生理学に取り入れたのは圧巻だ。

本書は、これから SVT を学ぼうという若手はもちろん、すでにアプレーターとして成長している中堅にとっても一読の価値がある逸品だ。視点が素晴らしい。約 20 年間、彼の成長をそばから見てきた自分にとって、臨床電気生理学を担う世代は変わったという実感を味わわせてくれた。さあ、あとは SVT 以外の不整脈をどう料理するか、これからも彼の活動に興味津々である。



●B5/頁 328/2026 年
定価：11,000 円
(本体 10,000 円 + 税 10%)
[ISBN978-4-260-06241-1]
医学書院 刊